

# タリアセンでのトゥルービュー

By: Ryan Hewson, Collection and Preservation Project Manager

1911年、フランク・ロイド・ライトは自身の住まいタリアセンをウィスコンシン州スプリング・グリーンに建てはじめた。ウェールズ語で「輝く頂」を意味するタリアセンは、荘厳な丘の頂にある。ウェールズ系の母方の親戚ロイド・ジョーンズ家が所有する周辺の農場で働く十代のライトは、この丘に魅了された。ライトはタリアセンを自宅兼スタジオとして、そして実際に稼働する農場として設計した。今日、タリアセン・エステートは合計600エーカーの敷地にライトがデザインした5つの建物と滝を有する。

タリアセン内の建物の継続的保存活動の一環として、ブルー・ロτζアは建物とコレクション保全の観点から20年以上ツアーの立ち入りを禁止してきた。最近、フランク・ロイド・ライト財団はTPI(タリアセン・プリザベーション・インコーポレーテッド)と協力して、ロτζアとそれに隣接する屋外テラスの3年に渡る修復を完了した。この意義深い修復によって住人と見学者は再びこの特別な場所に入れるようになった。



修復後の「松に桜花と鳥」  
スタジオTMK撮影

このプロジェクトの主要な構成要素のひとつは、歴史的価値の高い日本の屏風絵、17世紀の絵師狩野安信流作「松に桜花と鳥」の修復と再展示だった。フランク・ロイド・ライトの絵画、建築、装飾美術に日本美術が与えた影響については詳しい文献が残されている。ライトは自身の代表的な住宅設計の多くに日本の屏風や他の東洋美術を組み込んでいるが、日本と中国の絵画が最も豊富に、且つ最も念入りに統合された形で存在するのはタリアセンの中である。

数年前に始まった一連の調査により、タリアセン所蔵の日本と中国の絵画はその状態、外観、潜在寿命について著しく危うい状況にあり、いくつかは飾られた場所から保管庫に移さなければならないことが分かった。マサチューセッツ州サマービルにあるスタジオTMKの取締役T.K.マクリントックは、フランク・ロイド・ライト財団との長年の関係を祝って、絵画作品の保存作業を無償提供する予定だ。

「松に桜花と鳥」を陳列と来場者から保護するため、マクリントックは作品に有害な紫外線を最大99%カットする上に帯電しにくく傷付きにくく、割れても飛散しないトゥルービュー® オプティウム® アクリルを推奨した。

トゥルービューと財団のパートナーシップも手伝って、この連携の結果として、60年間収蔵庫に眠っていた作品が修復され、再び安全に展示された。この他に8隻の屏風が修復され、トゥルービュー・オプティウム・アクリルの保護フィルターの下に再展示される予定だ。

これら装飾物はタリアセンの歴史的展示物の中で最も重要なものだ。修復が完了すれば、来場者、学生、研究者はこうした作品を鑑賞したり研究したりすることができる。作品が人を楽しませるといふ本来の存在意義を取り戻すのだ。トゥルービュー・オプティウム・アクリルの反射防止コーティングは、作品と鑑賞者との間の境界を消す。気になる反射光がないオプティウムなら、ライト邸に相応しい親密さで屏風を鑑賞することが可能だ。

タリアセン自体の環境が独特で難しいため、オリジナルの屏風の展示は長年問題とされてきた。絵画の元の形を保ったまま壁に取り付けることができないと分かると、フランク・ロイド・ライトはある設置方策を採用した。元の形状から分離された折り畳み式の屏風のパネルは、それぞれの間に細長い装飾材を挟むか、全体をパネルから取り外して個別に木製パネルに取り付けられた。折り畳み式の屏風としてタリアセン中に残るこうしたパネルと絵画は壁に固定され、それらが置かれた部屋全体に使われたのと同じの形状・素材のモールディングを使用することによって視覚的な統一感がもたらされている。

絵画はベニヤ板に貼り込まれた上で直接壁面に取り付けてあったため、伝統的な方法での壁掛けは適さないと見なされた。元の設置方法では、ライトは1インチ幅のイトスギの角材を6枚のパネルそれぞれの間に配置した。古い写真は、大まかな大きさと見た目を把握するには役立ったが、



完成したインсталレーションの写真  
フランク・ロイド・ライト財団ライアン・ヒューソンの好意により掲載

作品が実際にどのように架けられていたかについてそこからはほとんど読み取れず、いい加減なものに見えた。

所蔵品と展示のチームは、写真によって1940年代から1950年代にかけてこの空間に飾られていたと確認されたこの屏風をロシアの修復に使うことに決めた。古い写真は主にメイナード・パーカーとペドロ・ゲレロによるもので、修復の取り組みを伝えるために使われた。タリアセンはフランク・ロイド・ライトの私邸であったため、絵画のほとんどは最後に仕上げられ、後世のための記録は行われなかった。我々が作業に使うべき証拠品の主なものは古い写真、口述証言の記録、そして建物自体に残された物証(仕上げまたは構造)であった。

保存処置の後、絵画は元々付いていたベニヤ板に再び貼り付けられた。保存に値すると思われる微妙な形態の違いがあったため。その上、ライトが使った素材は分割したパネルを壁に設置するために当時入手可能だった素材を代表するものであったし、貼り込みの形式は炭酸カルシウムを添加した紙を使った日本の屏風が持つ伝統的な多層構造で表面を強化することによって「アーカイバル」にすることが可能だった。

作品をカプセルに入れることが決まると、様々なグレーディング(アクリルまたはガラス)の組み込み方法が二次元と三次元のコンピューターモデリングによって検討された。保存チームはスタジオTKMと共同でライトの意図を汲みながら作品自体にも十分な保護を提供する最良のソリューションを見出した。この設置における最も重要なもののひとつはスタジオTKMが考案して、タリアセンの保存チームがデザインし、ウィスコンシン州マディソンのカスタムメタルズが製造した特注のZ型クリップである。

2つの図は作品の組み立てに使われた標準的な構成要素とそのサイズの詳細を見せるものである。既存の壁に歪みがあるために生ずる問題を軽減する目的で、裏側には約9.5mmの空間が加えられた。トゥルービューのアクリルと作品パネルとの空間は約12.7mmとし、来場者や住人がアクリルに直接もたれかかるようなことがあってもアクリルが作品に触れないようにしてある。この美術館品質の無反射アクリルは、作品を保護しながらライトのインテリアデザインのすばらしさを再び公開することを可能にした最高のソリューションだ。

タリアセン・エステートのマネージャーであるジム・エリクソンは次のように述べた。

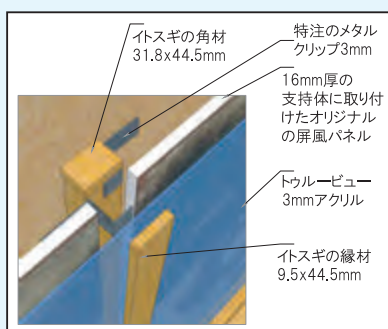
「タリアセン・コミュニティのメンバー、及びこのコレクションの存在を知るフランク・ロイド・ライトと日本美術の研究者たちは、常にこれらの作品がタリアセンを理解する上でも、ライトの芸術的視点に与えた影響を理解する上でも重要なものと捉えてきました。フランク・ロイド・ライトは日本画と浮世絵を初めて収集・研究した人々と、その後の世代の愛好家や目利きとを結び付けた重要な人物でした。」



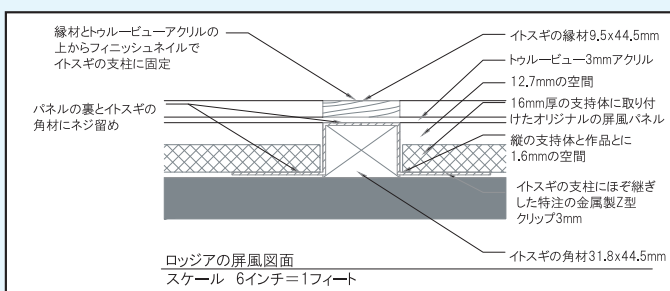
ライアン・ヒューソンはウィスコンシン州のタリアセンで所蔵品と展示のプロジェクト・マネージャーを務めている。ウィスコンシンにある芸術品と装飾デザインの監督責任者であり、タリアセンの保存にまつわる取り組みに対する建築学的サポートも提供する。ヒューソンはタリアセンに8年間滞在し、その内5年間は保存オフィスの一員として働いた。それ以前にはフランク・ロイド・ライト建築学校で3年間学び、2008年10月に建築学の修士号を取得した。現在はウィスコンシンで建築免許に取り組んでいる。

タリアセンやフランク・ロイド・ライトに関する更に詳しい情報は [www.taliesin.edu](http://www.taliesin.edu) 及び [www.franklloydwright.org](http://www.franklloydwright.org) で参照することができる。

タリアセンやフランク・ロイド・ライトに関する更に詳しい情報は [www.taliesin.edu](http://www.taliesin.edu) 及び [www.franklloydwright.org](http://www.franklloydwright.org) で参照することができる。



構造の断面図  
フランク・ロイド・ライト財団  
ライアン・ヒューソンの好意  
により掲載



カプセル詳細図  
フランク・ロイド・ライト財団ライアン・ヒューソンの好意により掲載